

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號六第 卷十二第

行發日一月六年四十正大

論叢

米價と關稅との關係に就て……………法學博士 河田 嗣郎
 勞働者所得に對する特別課稅……………法學博士 神戶 正雄
 天保以後の西陣……………經濟學博士 本庄榮治郎

說苑

運賃延戾制……………法學士 小島昌太郎
 獨逸古典學派の勞賃論……………法學士 山口正太郎
 マルクスの絶對地代に就て……………經濟學士 八木芳之助
 アダム・スミスの勞働價值法則の妥當性に就て……………經濟學士 森 耕二郎

雜錄

資本主義（經濟組織の下に於ける）商業の一機能に就て……………經濟學士 谷口 吉彥
 統計拾穗抄……………法學博士 財部 靜治

法令

衆議院議員選舉法摘要・貴族院令ノ改正・治安維持法・關東州ニ行ハルル命令ニ依ル日本船舶ニ關スル件・船舶無線電話施設法・漁業財團抵當法・倫敦協定ニ依リ實施セラルルコトニ決定シタル專門家計畫（所謂トーズ案概要）

附錄

本誌第二十卷總目錄

アダム・スミスに於ける勞働價值法則

の妥當性に就て (二・完)

森 耕 二 郎

本 論

(一) 資本が蓄積せられ、土地が私有せらるゝに至りたる後の近代の文明社會に於て、貨物の交換價值は如何にして決定せらるゝか、に就てのスミスの主張は、『諸國民の富』第一章第六節『貨物の價格の構成部分に就て』に於て詳さに述べられてゐる。今左に研究の便宜上その主要なる章句を拙き出して見る。

『資本が或る特殊なる人の手に蓄積せらるゝに至るや否や、彼等の或るものは、勞働者に原料および生活資料を供給する代りに、彼等の爲したる仕事を賣ることに依り、若くは彼等の勞働が原料の價值に附加する所のものに依り、利潤を獲得せんがために、當然に、彼等に仕事をさせることに依りその資本を使用するに至るであらう。完成せる生産物を、原料の代價及び勞働者の勞賃を充分支拂ふ以上に、金錢、勞働若くは他の財貨と交換することにより、その仕事に自分の資

本を賄したるところの企業家の利潤として何か、與へられねばならぬ。だから労働者が原料に加へる所の價值は、この場合には、二つの部分——勞賃を支拂ふ部分、及び雇主が前拂したる原料及び勞賃の全資本に對する利潤を支拂ふ部分——に分割される。資本家は労働者の爲した仕事を賣ることにより、彼れの資本を償却するに充分なるよりは、より多くの何らかを獲る豫期がなかつたならば、労働者を雇ふ興味を有つことができぬであらうし、又彼れの利潤が彼れの資本の量に或る比例を保たないならば、小額の資本より多額の資本を使ふと云ふ興味を有つことができぬであらう。

『……だから資本の利潤は貨物の價格の一構成要素を成すのであつて、それは勞賃とは全く異なるものであり、そうして全く異なる原則に支配せらるゝものである。』

『かゝる事物の状態の下に於ては、勞働の全生産物は、常に労働者に歸屬しない。労働者は多くの場合に於て、彼れの雇主たる資本家とそれを分け合はねばならぬ。貨物の獲得若くは生産に通常費されたる所の勞働の分量は、その貨物が通常購買し、支配し、若くは交換すべき(勞働の)分量を規制する唯一の事情ではない。或る附加的(勞働の)が、勞賃を前拂し、その勞働の原料を供給したる所の資本の利潤に對して與へられねばならぬことは明らかである。』

『如何なる國の土地にても悉く私有財産となるや否や、地主は、他の人々と同じやうに、蒔かざる所に刈らんことを好み、その自然的生産物に對してさへ地代を要求するに至る。……かくて労働者はそれらを蒐集する許可に對して償はねばならぬ、即ち彼れの勞働が蒐集し若くは生産

するもの、一部分を地主に與へねばならぬ。この部分、或は結局同じことになるが、この部分の價值は、土地の地代を構成し、かくて大部分の貨物の價格の第三の構成要素を成すのである。

『價格の凡ゆる異なる構成部分の眞價值は、その各々が購買し、支配し得らるゝ所の勞働の分量に依つて測定せらるゝと云ふことを認めざるを得ない。勞働は常に勞働に分解するその價格の部分の價值のみならず、地代に分解するその價格の部分、及び利潤に分解するその價格の部分の價值をも測定するのである。』¹⁾

『各々の社會の勞働に依り年々蒐集せられ若くは生産せらるゝ所のものゝ全部は、又は同じ事ではあるが、その全價格は、かゝる方法に依りその異なる成員の間に本源的に分配せられる。勞賃、利潤および地代は總ての收入の三つの本來的源泉であると同時に、總ての交換價值の三つの本來的源泉である。』²⁾

これらのスミスの詞及びその他の章句に現はれたる所に顧みて、彼は近世の資本家的社會に於ける價值論として、依然として（費消）勞働價值論を根柢に於て支持したのである、即ち彼に依れば、利潤、地代は勞働により創造せられたるところの價值の分割せられたるものに外ならない、とする解釋を先づ第一に左に吟味して見やう。

ツッカアカンドルはこの見解に立てる有力なる一人である。彼れの解釋する所に依れば、貨物には勞働のみが費されたものであつて、利潤はたゞ勞働生産物よりの割取に依つてのみ成立するものであると云ふことは、スミスが能ふ限り明瞭に讀者に説いた所であつて、彼は、資本が蓄

1) Smith, *ibid.* pp. 50—2.

2) Smith, *ibid.* p. 54.

積せらるゝに至ると、『労働者が原料に附加したる所の價值は、二つの部分に分たれる、』と云ひ、又『労働の全生産物は最早や常に労働者に屬しない。彼はそれを資本家と共に分け合はねばならぬ、』とも云つてゐる。

更に彼は、その他の場所に於て見出される左の如きスミスの詞²⁾を舉げて、自分の解釋の正しいことを確めやうとする。

『労働の生産物は労働の自然的報酬即ち勞賃を成す。土地の私有及び資本の蓄積なき原始草昧の時代に於ては、労働の全生産物は労働者に歸屬し、労働者はその生産物を分つべき地主、又は資本家を有つことがない。

『この状態にして繼續せば、勞賃は、分業の發達に従ひ生産力が増進するに伴ふて増加したであらう。』

『土地が私有財産となるや否や、地主は、労働者が土地から收穫し、若くは蒐集する所の殆んど總ての生産物から分け前を要求するに至る。この彼れの地代は、土地の上に費される所の労働の生産物よりの第一の控除を成す。……この利潤は土地の上に費される所の労働の生産物よりの第二の控除を成す。

『他の殆んど總ての労働の生産物も同じやうな利潤の控除に會ふ。總ての技術、工業に於て、大部分の労働者は、彼等の仕事の原料及びそれが完成せられる迄の彼等の勞賃、並に支持を前拂する所の主人を必要とする。彼(主人)は、彼等の労働の生産物、若くは労働がその上に施される

1) Zuckerkandl, Zur Theorie des Preises, 1889, S. 247.

2) この解釋をとるものゝ等しく舉げるもの

3) Zuckerkandl, a. a. O., S. 247—8.

4) Smith, ibid. p. 66.

所の原料にそが附加する所の價値の分け前に與かる。かくてこの分け前のうちに彼れの利潤が成立するのである。』¹⁾

ツツカアカンドルに依れば、これら²⁾のスマスの詞は、明らかに、彼が、勞働のみが貨物の價値の生産に費されたるものであつて、所謂生産資本は何等それに協力するところがない、と云ふ考を依然抱いてゐたことを示して餘りがある。若しそうでなかつたならば、資本利潤が常に勞働生産物の一部分若くは自然的勞賃の一部分であると云ふことは許されないであらう。

猶ほツツカアカンドルは、この解釋に關して彼れと反對の立場にあるところのもの、多くが、常に自己の解釋に有利に引用する所の左のスマスの章句に就ては、左の如く解釋すべきであるとしてゐる。

例へば、次のスマスの詞――

『文明國に於ては、その交換價値が勞働のみより生ずる商品は極めて僅少に過ぎずして、その遙かに大部分の交換價値には、地代及び利潤も亦大いに寄與する。だからその勞働の生産物は、之を産出し、製造し、而して之を市場に持ち來たすために使用せられたる勞働量よりも、遙かに大なる勞働量を購買又は支配するに常に充分であるであらう』³⁾はよろしく左の如く解釋すべきである。ツツカアカンドルは云ふ。

即ちスマスは、この詞に依つて、假令明瞭ではないが、一國の勞働生産物はこの生産物の產出に就て支拂はねばならぬ勞賃よりより多くの勞賃を支拂ひ得る、と云ふことを意味せしめてゐる。

- 1) Smith, *ibid.* p. 67.
- 2) Zuckerkandl. a. a. O., S. 248.
- 3) Zuckerkandl. a. a. O., S. 251—2.
- 4) Smith, *ibid.* p. 56.

その故は、資本、土地所有は、その要求を爲すことに依つて、勞賃を制限するからであり、且つ又資本、土地なくして單に労働のみに依つて產出せらるゝ所の貨物は極めて尠いからである。

更に次のスミスの詞――

『貨物の獲得若くは生産に通常使用せらるゝ所の労働の分量は、その貨物が通常購買し、支配し、若くは交換せらるべき(労働の)分量を規制する唯一の事情ではない。或る附加的(労働の)分量が、勞賃を前拂し、その労働の原料を供給したる所の資本の利潤に對して與へられねばならぬことは明らかである、』¹⁾も亦スミスが労働價值説を抛棄したることを示す有力なる一例證として、常に引用せらるゝ所であるが、ツッカアカンドルは、この文句も亦スミスが、例へば一百人の労働者の労働生産物は、一百人の労働者の労働よりはより多くの労働を買ひ得る、即ちそは一百人の労働者の勞賃高よりはより多い、と云ふことを意味してゐるに外ならぬと云ふ。

キヤナンも亦この解釋をされる學者の一人である。スミスがその労働價值説を果して文明社會に於ても支持したか否かの問題は、半面スミスに於ける利潤の發生的原因如何の問題を成すのであるが、キヤナンに依れば、スミスにありては、利潤は價值の構成要素にあらずして、労働者によりて附加せられたる價值よりの控除(reduction)であるとせられる。左にキヤナンのこの點に關しての解釋の一端を引いて見る。

『それ故に吾々は、アダム・スミスには、利潤は、労働者が生活資料及び生産原料を所有して居らぬの故を以て、止むを得ず服さざるを得ない所の労働の生産物からの控除として現はれた、と

云ふことができる。博士ベエム・バワアクは、スミスは、又時々、利潤は労働生産物の價格への附加であるとの意味の他の理論を開陳したと信じてゐるが、しかし博士の引用してゐる章句は、かゝる理論の存在してゐることを殆んど證明してゐない。¹⁾〔註〕

(註) チュルジョンも亦、スミスは資本主義的社會に於けると原始的社會に於けるとを問はず、一貫して労働價值説を支持したものであると解釋する。しかし彼はその批評に於て、スミスの價值論に於て見出されるところの費消労働價值説と支配労働價值説とを識別することに無關心であつて、文明社會に於てスミスが労働價值説を主張したか否かの問題は、彼が費消労働價值説を主張したか否かの問題に外ならない、ことを充分に意識してゐないやうである。今その批評から少しばかり引用して見やう。

『スミス曰く、「だからそれ自身の價值に變りがないところの労働のみが、總ての貨物の價值が、總ての時および所に於て、評價せられ比較され得るところの最後の眞の標準である」²⁾だから労働は、價值の唯一の一般的にして且つ正確なる尺度、若くは吾々が、總ての時および所に於て、諸々の貨物の價值を比較し得る唯一の標準であることは明らかである」³⁾と。これらの引用句に於て、スミスが労働の役割を社會の原始的狀態にのみ限定する意思を有つてゐたものと云ふことは現はれて居らぬ。加之ギユイヨーム・ドウ・グリーフがスミスの理論の歴史的出來事に就て書いたことゝは反對に、この蘇國の經濟學者は、總ゆる場所および時代に於ける絶對的不動的なる標準として労働をたてんと努むることにより、こゝに眞に科學的に振舞ふと試みたのであることは、否定することができないのである。⁴⁾』

チュルジョンは更にこの解釋を根據附けるところのスミスの他の二三の文章を引用したる後、左の如く言つてゐる。

『大部分の解釋者に依つて浮動である、矛盾である、と判斷されてゐるスミスの著書は、全體として或る一定の統一を保つてゐると云ふことを、これらの引用句から結論することがどうしてできないか？ 疑もなく經濟法則の歴史的發展に従つて、價值の要素は數多くなる。最初労働によつて測定せられたる價值は、今やスミスに依れば生産費に依存してゐる。しかし

説苑

アダム・スミスに於ける労働價值法則の妥當性に就て第二十卷 (第六號一一九) 一〇六一

1) Cannan, Theories of Production and Distribution, p. 202.

2) Smith, *ibid.* p. 35.

3) Smith, *ibid.* p. 38.

4) Turgeon, La valeur d'après les économistes anglais et français, p. 61--2,

5) 屢々一般に引用せらるゝもの

乍ら以前と同じやうに、今日に於ても、生産費の複雑に拘はらず、價值は、スミスの考へに依れば、それが必要とせる勞働の分量に依つて測定せらるゝものである。若し利潤および地代が勞働を犠牲として現はれるとスミスが信じたことを想ひ起すならば、このことの論理的であり且つ自然的であることがわかるであらう。利潤および地代が勞働の報酬を先取するに至りたる後に於て、勞働は、その全體に於て考へられるならば、價值を測定するに充分である。……かくて勞働は、生産費のうちにありて、スミスがその理論の初めに於て説くところの永久的、一般的、絶對的標準として残るのである。』¹⁾

『兎に角勞働の觀念は、吾々が今迄分析したところに於ては、スミスの指導的、支配的觀念である。若し數學派が示したやうに、完全なる自由競争の下に於ては、物の價值の絶對なる動搖は、生産費の水準に歸着するの傾向があり、生産費それ自身は勞働に近づく傾向がある、と云ふことが眞であるならば、スミスの法式は限り極めて古昔の社會にのみならず、極めて進歩したる社會にも亦等しく適用せらるゝであらう。』²⁾

なほドウニースも大體にこの第一の解釋をとる。³⁾

右に擧げたる所の解釋に反對して、スミスはその(費消)勞働價值説を一貫することなくして、資本の蓄積、土地の私有の認めらるゝ社會に於ては、他の價值法則、即ち利潤、地代、勞賃を價值構成要素とする一種の生産費價值法則の作用すべきことを主張したものであるとするものがある。左にその主なる二三のもの、説く所を顧みるであらう。

ウイテイカは、その『英國經濟學に於ける勞働價值説の歴史及び批評』に於て、この點に關するスミスの態度に就て左の如く言つてゐる。

『價值の本質がその儘現はれてゐると思はれる所の假定的の原始的狀態を説く時には、彼(スミス)は、費消勞働標準と支配勞働標準とをともに、何等その間の關係に就て云ふことなくして、

1) Turgeon, op. cit., p. 63-4.

2) Turgeon, op. cit., p. 66.

3) Denis, Histoire des systemes économiques et socialistes, 1904. V. I, p. 268-70.

4) labour cost は費消勞働よりは寧ろ勞働費用と譯すべきであるが、前後の關係よりこゝには前者の譯語を用ゆ。

提言したのであつた。ところが彼が進歩せる状態の下に於ける價值の問題に近づくや否や、彼はこの二つの標準の關係に就ての自分の見解を説明し、そうしてその前者、即ち費消勞働標準を棄てるに至つた。社會の原始的状態の下に於ては、貨物の費消勞働は、交換に於て貨物が支配する勞働の分量を決定する。勞働のこの二つの分量は、當然に同じでなければならぬ。だから（かゝる場合には）勞働の全生産物は勞働者に屬し、利潤若くは地代が存在して費消勞働と價值との間の均衡を破るが如きことはない。しかし乍ら現今の社會に於ては趣が異なつて来る。……一言にして云へば、（近世の社會に於ては）交換價值は最早や費消勞働に比例しない。何故なれば貨物の價值は、それが生産に費されたる所の勞働のみならず資本及び土地をも償ふ所の要素を含んで居らねばならぬから。にも拘はらず進歩せる社會に於て生産せられたるかゝる貨物の眞價值は、その貨物が交換するに當つて支配する所の勞働に依つて測定せられるのである。……要するにアダム・スミスは、價值論を實際生活に適用するに當つて、企業家生産費の法則（the law of entrepreneur's cost）の古い形、並に價值の支配勞働尺度を採つたのであつて、純粹なる正統學派の勞働價值論として當然に考へられてゐる所のもの、即ち費消勞働は市場價值を規制すると云ふことを棄て、しまつたのである。』^註

（註）資本蓄積せられ、土地私有せらるゝ所の近代の社會に於けるスミスの價值論には何等矛盾も撞着もなく、彼は終始一種の生産費説を一貫して支持したのであるといふことを極力主張する人に我か三邊金藏教授がある。²⁾教授は、多くのスミスの章句（その多くのは擧げた）を引用して、それらには何等彼が勞働價值説を主張若くは暗示したと認むべき個所がない、べ

- 1) Whitaker, History & Criticism of the Labour Theory of Value, pp. 29—31.
- 2) 三田學會雜誌第十七卷第七號『アダム・スミスの價值論に於ける鄭闡に就て』

エム・バウアクの所謂『二つの互に抵觸する見解』は互に相容れ相合して自ら一個の立言中に融け行くを見るのであるとして居られる。しかし乍らかゝる社會に於ける價值論が勞働價值論と何等係はりがないと云ふのは、餘りに彼れの價值論を皮相的に解したるものではあるまいか。教授の擧げられたる章句の多くは、スミスの價值論一般に通ずる態度に顧みて、却つて吾々をしてかゝる社會に於ても彼が勞働價值論を拋棄したものでないことを考へさせるのである。

小泉信三教授も亦、スミスは文明社會に於て、勞働價值論に代はるものとして、一種の生産費價值論を主張したものであると言ひ放つて居られる一人である。

右の見解の外に、スミスに依れば、文明社會に於ける貨物の價值の決定は、それが生産に費されたる所の利潤・地代、勞賃に依存するのであるが、それと同時に、彼れの著書の或る個所に於ては彼が猶ほ純粹なる形に於ける勞働價值説を支持してゐるが如き彼れの言葉が見出される、彼れの價值論(文明社會に於ける)は矛盾を極めてゐる、と云ふものがある。この見解の下にあるものはかなり多い。(註一) 私は次にこの解釋をとれる二三のものに就て、彼等の説く所を吟味して見やう。

リストは、スミスが右の社會に於て勞働價值法則並びに生産費價值法則の二様の價值法則を立てたることを詳しく述べたる後、左の如く言つてゐる。

『スミスは、勞働の後に、かくの如く價值の新らしい決定的原因を見出した。而して若し社會主義者が第一の假定に寄り集つたと云ふならば、ジェヂンスに至る迄の經濟學者の大部分は第二のものを採用したと云へる。スミスはこの二様の價值説の孰れを採るべきかを確然と決定するの勇氣がなかつたのである。それらの二つは相並んでその説明の裡に存在してゐるので、彼はその

孰れかを棄て去る決心がつかねたのである。その結果彼れの著書には、到底妥協することができない幾多の矛盾が見出される。例へば、或る時は、資本及び土地は勞働に依つて造られたるものに或るものを附加し、勞賃と共に生産費を決定する所の利潤及び地代を通常造ることにより、新しい價値の源泉を成すものであると看做されてゐる。又或時には、利潤及び地代は、勞働のみに依つて創造せられたる價値よりの資本家及び地主の割取であるとせられてゐる。ために或る者は彼を目して社會主義者であるとしてゐる。しかし乍ら詰る所、彼れの價値論を支配してゐるものは生産費説であつて、貨物の自然價格はその生産費と一致する所の價格を意味するとせられてゐる。¹⁾』

更にベエム・バワーク²⁾に依れば、スミスのかゝる社會に於ける價値論には、二つの相互に矛盾せる價値論、即ち生産費價値論(ベエムの所謂第一の解釋)及び勞働價値論(彼れの所謂第二の解釋)が相交錯して存在してゐる、随つてスミスは資本利潤の原理を組織的に研究し、深くその本源を瞭にするどころがなかつた。ベエムはさきに引用せるスミスの詞、及びその他の彼れの詞より、第一の解釋に當るものと、第二の解釋に當るものを選び分けて自分の解釋を確めやうとしてゐるのである。(註二)

(註一) カウラも亦この種の解釋をとれる一人である。³⁾

(註二) ベエム・バワークが彼れの所謂第一の解釋に當るものとして引用せる所のスミスの章句は左の如きものである。

『資本が或る特別なる人の手に蓄積せらるゝに至るや否や云々……、完成せる生産物を、原料の代價及び勞働者の勞賃を

1) Gide et Rist, Histoire des doctrines économiques, pp. 90—2.

2) Böhm-Bawerk, Kapital und Kapitalzins, Bd. I. 4 Aufl. SS. 63—5.

3) Kaula, Die Geschichtliche Entwicklung der Modernen Werttheorien, SS. 138—40.

充分支拂ふ以上に、勞働若くは他の貨物と交換することにより、その仕事に自分の資本を賭したところの企業家の利潤として何か、與へられねばならぬ。¹⁾

「貨物の獲得若くは生産に通常費されたる所の勞働の分量は、その貨物が通常購買し、支配し、若くは交換すべき(勞働の)分量を規制する唯一の事情ではない。」云々²⁾

「文明國に於ては、その交換價值が勞働のみより生ずる商品は極めて僅少に過ぎずして、その遙かに大部分の交換價值には、地代及び利潤も亦大いに寄與する。」云々³⁾

「高い若くは低い勞賃又は利潤は、高い若くは低い價值の原因であり、高い若くは低い地代はその結果である。」⁴⁾

(二) 以上述べたる所に依り、文明社會に於てもスミスは本來の形に於ける勞働價值法則の作用すべきことを説いたのであるか否か、即ちかゝる社會に於けるスミスの價值論の正體如何、に就ての三様の解釋を、その各々の代表的なるものに依つて指し示したのであるが、吾々は果してそのいづれをとるべきであらうか、若くはそれらの外に猶ほ殘されたる解釋があるであらうか？ そのいづれにせよ、かゝる社會に於けるスミスの價值論の眞の解釋は、一般勞働價值説の本質(特にそれと生産價格との關係)を顧みると共に、スミスの價值論全般を通じて有せる態度、若くは彼れの價值論の基本的內容(例へば費消勞働價值説および支配勞働價值説各々の本質並に相互の關係、眞實價值(格)概念と交換價值若くは價格概念との關係など)を克く理解したる後に於て、甫めて期待し得らるゝであらうと思ふ。而してかゝる用意あるものは、その解釋が右に述べたる如く多岐に亘つてゐるスミスの價值論も論理的には決して矛盾を極めて居るものではなく(原始

1) Smith, *ibid.* p. 50. 前出
2) Smith, *ibid.* p. 51. 前出
3) Smith, *ibid.* p. 56. 前出
4) Smith, *ibid.* p. 146.

社會に於ける價值と文明社會に於ける價值との間、及び後者の價值論それ自身に於て、彼自身の價值論一般に對する態度よりしては、彼が文明社會に於てかゝる價值論を支持するに至るは、當に自然の道行であることが會得せられ、彼れの價值論に於ける難問も案外容易に永解せらるゝであらうことを信じて疑はないのである。私はかゝる見地により左にこの問題に就て若干の私見を開陳して見たいと思ふ。

資本主義的社會に於けるスミスの價值論に於ても、貨物の交換價值、眞價值は結局それが生産に費されたる勞働のみに依つて決定せらるゝ、としたる多くの文句が見出されることは否定し得ない。而してこのことは、彼が(費消)勞働價值説をその價值論の根柢に於て支持することにより、剩餘價值の發生源泉を暗示したことを優に示すに足りるのである。例へばさきに引用せる所のスミスの文章——『資本が或る特殊なる人の手に蓄積せらるゝに至るや否や云々、』——は、(註二)その一部分に就て、或る學者は異なる意義に解せんとするけれども、スミスが、『彼等の爲したる仕事を賣ることにより、若くは彼等の勞働が原料の價值に附加するところのものを賣ることにより云々、』と云ひ、『勞働者が原料に附加する所の價值は、この場合には二つの部分——勞賃を支拂ふ部分、及び雇主が前拂したる原料及び勞賃の全資本に對する利潤を支拂ふ部分——に分割される、』と云ふに徴して、この章句は、利潤は、商品の販賣によりて、若くは商品がその(勞働)價值以上に賣らるゝことによりて發生するものではなく、それはたゞ勞働のみに依つて創めて造らるゝ所の價值の分け前たるに過ぎない、それは價值の構成要素ではない、而して資本家は

その資本の使用に對してかゝる労働價值よりの割取としての利潤を獲得するものである、と云ふことを明に意味してゐる。更に詳しくこのスミスの文章を見んに、彼に依れば、價值即ち労働者が原料に附加する所の労働分量は二つの部分に分たれる。その一つは勞賃を支拂ふものであつて、それは勞賃の形となつて労働者のもとに還つて來る所の労働分量、即ちマルクスの所謂支拂勞働を意味する。他の一つは利潤を成すものであつて、それは資本家が代價を支拂はすして賣る所の労働分量、即ちマルクス所謂不拂労働を意味する。要するに資本家は商品とその(労働)價值通りに賣ることにより、即ちそれに含まれてゐる労働分量(時間)に依つて賣ることにより、利潤を獲得するのである。マルクスはこのスミスの詞を解して次の如く言つてゐる。

『アダム・スミスはこれに依つて、この状態——その結果労働者には最早や自分の労働の結果の全部が歸屬せず、彼はそれを若くはその價值を資本家と寧ろ分け合はねばならないやうな状態——は、商品が相互に交換されるどころの關係若くはその交換價值は、それに實體化されてゐる所の労働時間の分量に依つて決定せらるゝとする法則を廢除するものであると云ふことを否定してゐる。……アダム・スミスはこれに依つて剩餘價值の眞の源泉を認めたのである。』²⁾

スミスのこの態度を有力に裏書きする彼自身の詞は、この外にも數多く見受けられる。例へば、『如何なる國の土地にても悉く私有財産となるや否や、地主は他の人々と同じやうに、蒔かざる所に刈らんことを好み、その自然的生産物に對してさへ地代を要求するに至る。……』³⁾

『年々社會の勞働に依つて蒐集せられ若くは生産せらるゝ所の全部は、或は同じことではある

1) スミスは労働者が原料に附加する價值—労働分量 (quantity of labour)、なることを明確に捉へ得なかつた。後者に依り彼は寧ろ勞賃若くは勞働力を意味せしめてゐる。

2) Marx, Theorien über den Mehrwert, Bd. I, S. 140—1.

3) Smith, ibid. p. 51. 前出

が、その全價格は、このやうな方法により元來異なつた人々の間に分配される。¹⁾

更にさきにツツカアカンドルの擧げたる次の二つの章句、即ち『勞働の生産物は勞働の自然的報酬即ち勞賃を成す云々、』及び『土地が私有財産となるや否や、地主は勞働者が土地から收獲し若くは蒐集するを得る殆んど總ての生産物から分け前を要求するに至る云々、』も亦スミスのこの立場をよく證明するに足るものであらう。(註二)

(註一)『完成せる商品を、原料の代價及び勞働者の勞賃を充分に支拂ふ以上に、金錢、勞働若くは他の財貨と交換することにより』²⁾云々、の一句に於ける『勞働』はスミスの誤りであるとマルクスは云ふ。彼はこのスミスの詞に就て左の如く批評してゐる。

『資本家が商品を貨幣若くは他の商品と交換して利潤を獲るのは、彼が支拂ふ勞働よりも多くの勞働を賣り拂ふに由るのであつて、實體化されたる同じ分量を、生きたる勞働の同じ分量と交換することに由るのではない。だからスミスは「貨幣若くは他の商品と交換すると云ふこと」と「完成商品と勞働とを交換すると云ふこと」を並立せしめてはならぬのである。何故と云ふに剩餘價值は、第一の交換に於て、商品がその價值通りに、即ちそれに含まれてゐる勞働時間——しかしその一部分は支拂はれざる所のものであるが——に従つて賣らるゝことに依り、發生するものである。この場合には、資本家は過去の勞働の同じ分量を生きた勞働の同じ分量と交換しない、即ち彼が獲た所の生きた勞働の分量は、彼が支拂つた所の生きた勞働の分量より大であると云ふことが前提されてゐる。そうでなかつたならば勞働者の勞賃はその生産物の價值に同じであるであらう。完成商品が貨幣若くは商品と交換される場合に於ける利潤は、若しその商品が價值通りに賣れる場合には、完成商品と生きた勞働との間の交換は、他の法則の支配を受けると云ふことに依り、言ひ換へればこの場合同じものが交換されないことと云ふことに依り、出現するのである。この二つの場合を混同してはならぬ。要するに利潤は勞働者が勞働原料に附加したる所の價值よりの控除たるに外ならぬ。』³⁾

説苑

アダム・スミスに於ける勞働價值法則の妥當性に就て 第二十卷 (第六號 一二七) 一〇六九

1) Smith, ibid. p. 54.

2) これはスミスの所謂支配勞働の意義の曖昧なることの證據の一つである。

3) Marx, a. a. O., S. 141—2.

(註二) この點に關するスミスの詞をもう一つ擧げて見る。

『他の國に於ては、地代、利潤は勞賃を食つてしまふ。そして二つの優者階級が劣者階級を壓迫するのである。』¹⁾

右に引用したところの諸々のスミスの詞は疑もなく、彼が資本主義社會に於ても價值論の根柢を費消労働價值説に置いてゐたことを示すものであつて、このことに就ては餘りにかけ離れたる解釋がないのであるが、さきに擧げたる所の左のスミスの詞に就ては、その解釋の仕方が二つに分れてゐる。

『かゝる事物の状態の下に於ては、労働の全生産物は常に労働者に歸屬しない。労働者は多くの場合に於て、彼れの雇主たる資本家とそれを分け合はねばならぬ。貨物の獲得若くは生産に通常使用せられたる所の労働の分量は、その貨物が通常購買し、支配し、若くは交換すべき(労働の)分量を規制する唯一の事情ではない。或る附加的(労働の)分量が、勞賃を前拂し、その労働の原料を供給したる所の資本の利潤に對して、與へられねばならぬことは明らかである。』²⁾

このスミスの詞、特にその後半の部分は、彼れの價值論が生産費説に過ぎないとする論者により、スミスが貨物の生産に費されたる労働の分量のみがその價值を決定するのではなくして、利潤も亦その價值の決定に與るものであるとすることを明に示すものであると解せられてゐる。³⁾ 例へばベユム・バツアクはこの後半の章句に就て、『スミスはこれよりより明瞭に、勞賃を減少することなくして、利子請求の價格を上昇する作用あることを云ひ現はすことができない。』と云つてゐる。⁴⁾

ところがさきに述べたる如く、ツツカアカンドルは、このスミスの詞を、彼が労働者の生産物はその労働者の労働よりはより多くの労働を買ひ得る、即ち生産物(に含まれてゐる労働)は勞賃

1) Smith, Wealth of Nations, Cannan's ed. VII, p. 67.

2) Smith, Wealth of Nations, VI, p. 51. 前出

3) この解釋をするもの甚だ多し、一々擧げぬ

4) Böhm-Bawerk, a. a. O., S. 64.

よりはその價值が高い、と云はんとするものであることを示してゐるに過ぎないと云ふのであるが、マルクスも亦このスミスの詞を解することツツアカカンドルと相似たるものであつて、ベエムその他の解釋と反對に立つてゐる。マルクスはこの句を引用したる後左の如く云つてゐる。

『このことは全く正しい。資本家的生産の下に於ては、貨幣若くは商品に表現せられたる實體化されたる勞働は、それ自身に含まれたる勞働の分量の外に、常に猶は資本の利潤として、生きたる勞働の附加的の分量を買ふ。他の言葉にて言へば、それは（實體化されたる勞働は）、生きたる勞働の一部分をたゞで獲る、即ちその代價を支拂はずして獲るのである。』

而してマルクスは、スミスがこれらの變化が如何にして資本家的生産に伴うて起つたかを強調したことは、彼れのリカアドに優る點であると云ふ。

惟ふにこの『貨物の獲得云々』の彼れの詞を、そのみ切り離して解釋すれば、この句は彼が恰も勞働價值説を拋棄したることを意味するが如く見えるけれども、その前後の詞、『かゝる事物の狀態の下に於ては、勞働の全生産物は云々、』『或る附加的（勞働の）分量が云々、』に徴し、ならびに彼が常に勞働力、勞賃、勞働（分量）などの觀念を混淆し、勞働力（その價格が勞賃）は商品として買はれて、勞働を支出するものであり、そうしてその支出する勞働の分量は、勞働力を支持若くは回復するに必要な勞働の分量（即ち勞働者が受取る勞働分量）より常に必らず大でなければならぬ、と云ふことを明確に云ひ現はすことができなかった事實より推して、この句は正しく『貨物の獲得若くは生産に従事する所の勞働者の勞賃を支拂ふ勞働の分量云々、』と解すべきであ

らうと思ふ。

要するにスミスが、こゝに引用せる文章を通じて、勞働者の創造したところの價值は、分れて勞賃及び利潤を成すと云ふことを、説かんとしたものであることは疑ふべくもないのである。彼が費消勞働價值、利潤、勞賃、及び地代價值及び支配勞働價值の三者を漫然同じものであるとする彼れ特有の態度は、特にこの章句及びこれにつける章句に於て現はれてゐる。

かく解して來ると、この解釋に反對の立場にあるものに依り、スミスが勞働價值説を拋棄したることの他の有力なる證據の一として、屢々引用せらるゝところの左の彼れの言葉も亦、右述べたるが如き意義に解すべきが當然であると云はねばならぬ。

『文明國に於ては、その交換價值が勞働のみより生ずる商品は極めて僅少に過ぎずして、その遙かに大部分の交換價值には、地代及び利潤も亦大いに寄與する。それ故にその勞働の年々の生産物は、之を産出し、製造し、而して之を市場に持ち來すために使用せられたる勞働の分量よりも遙かに大なる勞働の分量を購買又は支配するに常に充分であるであらう。』¹⁾

以上吟味したる所により、スミスが單り原始草昧の社會に於てのみならず、資本蓄積せられ、土地占有せらるゝ社會に於ても依然として、(費消)勞働價值説を支持し、彼れの價值論の基礎としたことが容易に推測し得らるゝ。スミスが其著『諸國民の富』の開卷劈頭に於て、『總ゆる國民の年々の勞働は、その國民に、そが年々消費する所の人生の必要品及び便利品を本源的に供給するところの基金であり、而してそれらは常にその勞働の直接の生産物若くはその勞働を以て他の國民から買ふものより成り立つてゐる』²⁾と云ひ、又他の場所に於て、『それ自身の價值に變りが

1) Smith, *ibid.* p. 56.

2) Smith, *ibid.* p. 1.

ないところの勞働のみが、總ゆる貨物の價值の、總ゆる時および所に於て、評價せられ比較され得るところの最後の眞の標準である、』と云つてゐるのは、偶々勞働を以て價值、交換價值の決定要素なりとする彼れの立場を物語るものであらう。

(三) 以上スミス自身の詞を分析解釋することにより、吾々は、スミスが近代の資本家的社會に於ても依然として費消勞働價值説をその根柢に於て支持し、利潤は勞働價值よりの割取なりとして、所謂餘剩價值の發生成立を認識したるものであることを知り得るのであるが、しかし彼れのかくの如き態度は、主としてその價值論の根柢若くは裏面に於て見受けらるゝに過ぎないのであつて、明らかにその表面上に浮び出てゐるとは云はれない。かゝる社會に於けるスミスの價值論には、費消勞働價值説と相並んで、若くは表裏の關係に於て、勞賃、利潤及び地代を構成要素とする所の一種の生産費説が主張せられてゐる、而も後者が主として表面上に現はれてゐる、ことは看逃すことができない。例へば屢々引用せらるゝ彼れの詞に左の如きものがある。

『勞賃、利潤及び地代は、總ゆる交換價值のみならず、總ゆる收入の二つの本源的原因である。』²⁾ (I, 11)

『勞賃、利潤及び地代は、總ゆる收入の三つの本源的原因である、』と云ふに就ては別に問題はない。極めて自明のことである。こゝに問題となるのは、『勞賃、利潤及び地代は、總ゆる交換價值の三つの本源的原因である、』と云ふことに就てである。即ちさきに見た所に依れば、スミスは、價值の根源は勞働であつて、勞働に依つて創造せられたる所の價值が、勞賃、利潤、地代と

1) Smith, *ibid.* p. 35.

2) Smith, *ibid.* p. 54.

云ふ形をとつて、それ〳〵勞働者、資本家及び地主に歸屬するに至るものであるとしたに拘はらず、こゝに勞賃、利潤及び地代が總ゆる交換價值の本來的源泉であると云ふのはどうしたことであるか、そこに前後矛盾はないか、と云ふことが問題となつて来る。この詞はスミスが勞働價值説をすて、生産費説をどるに至つたことを明に示すものではないか問題となつて来る。

或るものはこのスミスの態度は、明に彼が勞働價值説をすて、生産費説をどるに至つたことを示すものであると云ひ、又他の或るものは、それはスミスの價值論が混亂と矛盾とに満てることを物語るものである、と云ふ。しかし乍ら、假令彼がこの二つの價值論を同時に提出するに就ては、そこに未熟不充分的なものであることは認めざるを得ないにしても、この二つの價值論(正確に言へば價值論と價格論)を並び提言することそれ自體は、彼れの價值論の缺點ではなくして、寧ろその長所であるのみならず、この彼れの態度は彼れの價值論一般に通ずる態度より見て、決して矛盾せるものではない、と私は思ふ。スミスの價值論にありては、費消勞働と支配勞働とはともに貨物の交換價值、價值の決定標準たり得るものとせられ、そうして又そこには臆げ乍らではあるが、價值、眞實價值なる詞と共に、交換價值、價格なる詞が用ひられてゐる。而して彼に於ては、明確にはないが、一般的には、費消勞働は價值、眞實價值(格)を、支配勞働は交換價值、價格を、説明せんとし、そうして文明社會に於ては、勞働(費消若くは支配勞働)は價值、眞實價值(價格)を、利潤、地代及び勞賃は交換價值、價格を、説明せんとする所の用意若くは態度が現はれてゐる、と解釋しても差支なからうかと思はれる。これらのスミスが彼れの勞働

1) Smith, *ibid.* p. 32.

2) *ibid.* pp. 32, 33.

3) *ibid.* pp. 50, 52, 67.

4) *ibid.* p. 54.

5) マルクスに於ては交換價值と價值とは 同じものではないが、相離るべからざ

價值論を一貫して支持してゐたと認むべき態度に顧みるときは、彼が右擧げたる文章に於て、貨物の現實の交換價值の勞賃、利潤及び地代により構成せらるゝと云ふは、その當否は兎も角、彼れの價值論の構成それ自身から見れば、矛盾でも何でも無い。随つて又このことは彼が費消勞働價值説を拋棄したことを必らずしも意味してゐない。もどく／＼スミスの價值論に於ては、費消勞働價值、支配勞働價值、及び地代、利潤、勞賃より成る生産費價值は、漫然と同じものであるとせられてゐるからである。さればこそスミスは、この『勞賃、利潤云々』の詞の直ぐ前に『各々の社會の勞働に依り年々蒐集せられ若くは生産せらるゝ所のものゝ全部は、又は同じことではあるが、その全價格は、かゝる方法に依りその異なる成員の間に本源的に分配せられる、』と云ひて費消勞働價值説を依然として支持してゐるのである。

スミスの價值論の根本的命題には、費消、支配兩價值論が相並んで提言せられてゐることは何人も直ちに認めるのであるが、文明社會に於ける彼れの價值論も亦同様に、この二つの價值論に終始してゐるのであつて、たゞこの場合には、費消勞働價值説が一種の生産費價值説の形をどつて現はれ、そうしてこゝに於ては原始社會に於けるよりは、この形に於ける費消勞働價值説が支配勞働價值説よりより多く彼れの價值論の主要部分を占めてゐるにすぎない。

之を要するに、文明社會に於けるスミスの價值論は、單に生産費價值説でなくは勿論、又單に費消勞働價值説でもなく、又支配勞働價值説でもない。それはこれらを俱に包含してゐる。そうして或るものゝ云ふが如く、スミスに於て生産、費消勞働兩價值論が並び現はれてゐるのは、彼

るものとせられ、そうしてそれらの概念と生産價格概念とは二つの相異なる範疇であるとせられてゐる。随つて價值と生産價格とは乖離することがあり得る。

れの價值論の矛盾撞着を意味してゐるのではなくして、それは寧ろ彼れの價值論の長所を成してゐるのであるが、彼は、彼れの生産費價值は寧ろマルクスの生産價格であつて、それは労働價值より出づるものであるにしても、その二者は各々別の範疇に屬するものなることを、認識することを得ずして、この二者相互の關係を、正當に、充分に取扱ふことができなかった。のみならずこれらの價值論の外に依然として最後迄支配労働價值説が附隨して提言せらるゝことにより、彼れの價值論はいつ迄も似而非的労働價值論の弱點に付き纏はれたのであつて、要する所、スミスの労働價值説はこの二つの理由により遂にその不純なる形を脱することができなかったのである。(註二)

(註二) 同様な見解はこの外にも見出される。その一つ二つを擧げて見る。

『勞賃の増加は、労働に分解せらるゝ所の價格の部分を増加せしめることにより、必然的に多くの商品の價格を増加せしめる云々。』

『だから地代は、勞賃、利潤とは異なる方法にて、貨物の價格の構成に近入るものであると云ふことを認めざるを得ない。高い若くは低い勞賃及び利潤は、高い若くは低い價格の原因であり、高い若くは低い地代はその結果である。或る特定の貨物の價格が高い若くは低いと云ふのは、その貨物を市場に持つて行くがために、高い若くは低い勞賃、利潤を支拂はねばならぬからである。……』²⁾

(註二) マルクスが初めて彼れの經濟理論を組織的に纏めたものであると云はれてゐるところの著作、『經濟學批判』に於て、この論文に於て問題としたる點に關して、左の如く言つてゐるが、それは一般的に言へるものにすぎない。

『まことにアダム・スミスは、商品の價值をその商品中に包含さるゝ労働時間に依り決定したのであつたが、彼はこの價值決

1) Smith, *ibid.* p. 88.
2) Smith, *ibid.* p. 147.

定の實現を彼れ以前の時代に遡戻りさしたのである、換言すれば、單一商品の見地から彼に眞實なりと思はれたるものは、その商品の代りに資本、賃労働、地代その他の一層高級且つ複雑なる形態の現はるゝに及んで忽ち不明瞭になつてしまつた。この事實は彼が次の如きことを言つて居るに徴して明らかである。——商品の價值が労働時間に依つて測定せらるゝのは、人々が互に資本家、賃銀労働者、地主、借地人、高利貸等としてではなく、單なる商品生産者及び商品交換者としてのみ對立するところのブルジョア社會の失樂園に於てのみ見られる現象である。と。』

結 論

右述べたる所により、資本蓄積せられ、土地占有せらるゝに至りたる資本家的社會に於けるミスの價值論にありては、支配労働價值説の外に、一方に於て彼が依然として(費消)労働價值説を支持したと認むべき章句の見出されると同時に、他方に於て彼が一種の生産費價值説を主張したるが如き詞を發見し得るのであつて、まことにマルクスの言へるが如く、ミスは『最初商品の價值を研究して、それを屢々正しく決定した、即ち彼は、一般的に餘剩價值の發生及びその特殊なる形態を發見し、賃賃、及び利潤はこの價值から導き出されるものであるとしたのである。然るに彼は次にまるでアペコベの行き方をするやうになつた。即ち彼は商品の價值——そこからたつた今彼は賃賃、利潤を導き出したのだ——を反對に賃賃、利潤及び地代の自然的價格の結合から導き出さうとしたのである。』

しかし乍ら彼が價值の源泉を費消労働に求むると同時に、交換價值、價格を利潤、賃賃及び地

1) Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie, S. 42. (佐野氏譯本64頁)
2) Marx, Theorien über den Mehrwert. Bd. I, S. 164.

代により決定せんとしたることそれ自身は、或るもの、説くが如く、彼れの價值論をして混亂紛糾取捨すべからざる迄に導いたものである、と云はんよりは、寧ろ彼れの價值論が、現實の社會に於ける價值、價格現象の本質を説明すべく、可成成形せる形に近づいてゐたことを物語るものである。たゞ彼にありては、勞賃、利潤及び地代は(生産)價格を構成するものであつて、それは資本的社會の外部的現象形態として表面に浮び出る、が結局する所それは本源的に費消労働に本づくものであつて、労働價值法則こそ、たゞそれのみが、資本家的社會に於ける貨物の交換價值、價值の決定的支配法則であることが、充分に明確に認識されなかつたのである。

スミス以後労働價值論を云爲するものにして、早晚この(費消)労働價值説と生産費價值説との關係の解明に悩まされざるはない。この二者の關係は労働價值説に於ける最も大なる難關を成してゐる。この難關に出會つて、或るものは労働價值説を全然拋棄し、或るものは然かせざるもこの問題に對して明確なる答解を與ふことをよくせない。スミスがこの二者のそれ〴〵の本質及び關係に就て、充分なる説明を與ふことができなかったのは、彼れの價值論に對する根本的態度、研究方法など緒々の事情にも因るであらうが、又當時の狀態に顧みて止むを得ざるものであると云はねばならぬ。

マルクスはスミスの價值論の研究方法を批評して左の如く言つてゐるが、この詞は彼れの價值論の功績と欠陥とをよく簡明に言ひ現はしたものである、と云つてよい。

『スミスは一方に於て、經濟的範疇の内部的關係、即ち市民經濟制度の隠れたる構造を研究すると同時に、彼は他方に於て、その外に競争現象に瞭らかに現はるゝ所の關係を研究することに依り、市民生産過程に實際因はれたる人、利害關係ある人と全く同様に、非科學的なる觀察者と

なつてゐる。この二つの思考方法——その一つは市民制度の内的關係云々その生理學を究はめんとするものであり、他の一つは、單に、生活過程の裡に外見的に何が現はれ、そうしてそれが如何にして現はれるか、を書き誌るし、目錄にし、説述し、そうして法式的にそれが概念を決定するものである——は、スミスにありては、公平に相並んでゐるのみならず、斷えず入り亂れて相衝突してゐる。¹⁾』

之を要するに、スミスに於ては、(一)支配、費消兩勞働價值説が並び提言せられたこと、(二)費消勞働價值説は生産價值説にとつて代はられ、恰もそれ自身は姿を沒するが如き觀を呈するに至りたること、の二つの理由により、(費消)勞働價值法則の資本主義的社會に於ける貨物の價值、價格現象に妥當することが、不充分なる程度、不純なる形に於て、支持せられたるにすぎなかつた。かくの如くにしてスミスに於ては、(一)價值と生産價格との關係は問題とならず、(二)剩餘價值説が充分に展開するに至らなかつたのみならず、(三)スミスの所謂勞働價值は、この高度に發達せる商品生産社會——ここでは貨物は初めから交換のために生産せられる——に於ける商品交換關係より抽象せられたる勞働價值ではあり得なかつた。それはマルクスの所謂抽象的人間勞働價值ではどうしてもあり得なかつた。彼に於ては、價值隨つてそれが構成に與るところの勞働は、自然的具體的個人的偶發的性質のものであつて、歴史的抽象的社會的普遍的性質のものではない。嚴密に言へば、スミスの謂ふ所の勞働價值は、その實、經濟價值、價值として堪へ得べからざるものなのである。

然らばスミスの勞働價值説を純化發展せしめたと稱せらるゝ所のリカアドは、この點に就て如何なる程度の理解を有ち、勞働價值學說發展史上如何なる貢獻を爲したであらうか？ 私は筆を更めて次にこの問題を吟味して見たいと思ふ。(完)——一三・一〇・二八——

1) Marx, Theorien über den Mehrwert, Bd. II, Teil I, S. 2-3.